長覚院と水野レストランの設計についての考察

―建築家中原暢子の研究　第１報―

深石　圭子

中原暢子は、設計活動を行ったおよそ50年に約100件の設計を行っている。そのうち住居系が最も多く約74件で、非住居系は26件であった。非住居系の設計方法を分析するため、本稿では、1962年（昭和37年）に竣工した長覚院から1969年（昭和44年）設計の水野レストランの作品を取り上げる。1982年（昭和57年）の長覚院の模様替えで、HPシェルに格天井を張り、屋根に放射状にあった樋を銅板で覆うという、デザイン的に大きな変更がなされた。しかし、1969年（昭和44年）水野レストランの設計で既に異なった様式を統合するポストモダン的な設計していることから、中原暢子にとってこの模様替えは、違和感のない変更であったことが推察される。

キーワード：HPシェル　伝統　中原暢子　池辺陽　ポストモダニズム

１．研究の目的・方法

研究対象である元本学住居学科教授中原暢子は、大江スミの最後の教え子であるとともに、林雅子・山田初江とともに昭和25年制定された建築士法にもとづいて、1958年（昭和32年）女性のみで建築設計事務所を設立、戦後の住宅設計を牽引した著名な建築家である。

本研究では、中原暢子が生前設計した作品で、事務所員白井克典氏が中原暢子の依頼で自宅に保管していた設計図書及び中原暢子逝去後自宅（「暢庵」という）の取り壊しに際して、所有者佐藤氏（中原暢子の姪）から頂戴した中原の遺品を収集整理し中原暢子の設計方法をまとめるものである。

本稿では、1962年（昭和37年）に竣工した正林山長覺院浄泰寺（以下長覚院という）の初期のイメージ（図１、図２）と竣工した長覚院（図３）の大きな相違、1982年（昭和57年）の模様替えにおける考え方、これを明らかにするものとしての1969年（昭和44年）設計（図４）、1970年（昭和45年）10月10日三昧匠蔵としてオープンし

図１　長覚院のスケッチ　1961.12設計

図２　長覚院の模型

東京家政学院大学現代生活学部生活デザイン学科

図３　長覚院の竣工写真 1962.7

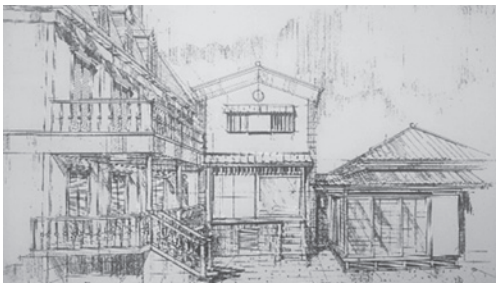

図４　水野レストランのスケッチ 1969 設計

た水野レストランの比較によって、中原暢子の設計方法を明らかにする。

２．中原暢子の経歴

中原暢子は、1929 年 1 月 5 月に埼玉県浦和市に生まれる。祖母は中原きよは、浦和市議会議長を経験し、父中原英寿は、師範学校教師を経験している。母は中原きよの。父母は職業人であった。

1945 年東京家政学院専門学校入学。保健科（生活科との資料もある。）同級生に永山スミ（本学名誉教授）。同氏の思い出によれば編み物が上手で、手先が器用だったといわれる。東京家政学院卒業後、直ちに労働省婦人少年局に勤務する。

しかし、東京家政学院を昭和 23 年（1948）卒業後も、建築への夢捨てがたく、「蔵田周忠がいる武蔵工業大学が良い」との恩師石本喜久治の勧めで、建築家を目指して昭和 25 年（1950.4）武蔵工業大学短期大学部建設科に入学、同大学を昭和 27 年（1952.3）に卒業する。笹原定彦に建築を学ぶ。武蔵工業大学短期大学部は昭和 25 年（1950）に開設されている。電気科、建設科、機械科の 3 学科。昭和 38 年（1963）廃止、武蔵工業大学に統合された。

３．池辺陽研究室での活動

東京大学第 2 工学部から改組された東京大学生産技術研究所の研究生として池辺研究室に所属する。研究テーマは「立体最小限住宅の設計」であった。具体的な仕事は建設工学研究会で行った。「新橋亭」という新橋から少し虎の門寄りの中華料理店のペントハウス。11 名。

研究室メンバー [1)]

1. 池辺陽
2. 関文子　1946-63
3. 嶺岸泰夫　1948-56
4. 吉田秀雄　1948-57
5. 北川允昭　1950-53
6. 柳下洋一　1950-53
7. 小泉幸夫　1951-53
8. 吉田桂二　1952-57
9. 尾崎昌凡　1953-55
10. 小宮山雅夫　1953-57
11. 中原暢子　1953-55

中原暢子が担当した作品について下記のようなエピソードが残っている。

「池辺研究室では、まず本郷の地震研究所の所長になった人の家をやったのですが、そしたらその施主にすっかり怒られてしまったんです。池辺さんに頼んだのに、こんな若い女の子がひとりで来たと。実のところ設計が気に入らなかったんでしょうね。猛然と怒られて、夜遅くに泣きながら池辺さんのところへ行きました。それで私はダメだと、設計の仕事はできないからやめさせて下さいと言ったんです。そうしたら失敗するたびに辞めてたら何もできないよ、失敗は成功のもとなんだから、現場からは外してあげるから少し事務所の中で図面を書きなさいと言われて、結局はそれで現在に至っています。」[2)]

従ってこの住宅には設計担当としての名前は見られない。

池辺研究室の作品の中で、設計担当として中原暢子の名前が記載されているものは下記のとおりである。設計担当者全員の氏名を記す。

秦邸（1953）

柳下洋一 北川允昭 中原暢子

「設計を行う最初から茶室の設計を行った」との話を伺ったことがあるが、秦邸がこれにあたると考えられる。

No.20（1954）

池辺陽 みねぎしやすお 中原暢子 小泉幸夫

この住宅は池辺作品の中でも代表的作品であり明確なゾーニングが、平面に実現されている。その形状からＴ型プランと呼ばれ、本学の住居計画等の授業のなかで、実際模型を作り確認しているものである。一般的には中原暢子が担当したことはあまり知られていないが、非常に完成度の高い作品である（図5）。

図5　No.20 Ｔ型住宅

No.24（1955）

計画案複数　国際建築 1955.11

No.28（1955）

池辺陽 中原暢子 新建築 1955.11

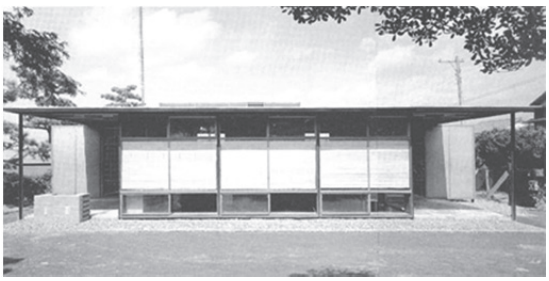

図6　No.28

難波和彦は「戦後モダニズム建築の極北　池辺陽試論」においてNo.28（図6）を次のように評価している。「クライアントがスチールサッシュ・メーカーの社長だったため、構造体にスチールを用いることが前提条件だった。骨組には型鋼ではなく、スチールサッシュの加工技術を利用した鉄板の曲物が用いられ、現場での組立てはすべてボルト締めとしている。プランや工法はきわめて近代的だが、スチールサッシュの繊細なプロポーションによって、池辺の作品のなかで最も和風の雰囲気を湛えた住宅となっている。これは、近代的な構法によって伝統的建築に匹敵する表現を生み出すという、池辺の主張を実践した好例といえるだろう。」[3)]

1950年代の伝統論争の中では、池辺研究室の1950年から55年の作品の中に安易な「日本的なもの」への傾斜がみられると厳しい批判が行われた。しかし、その頂点ともいえるこのNo.28は、設計担当として設計を進めたのは中原暢子であった。

モデュラ―コーディネーションの研究を行いながら、新しい材料を使いながら極めて機能主義的な住宅を追い求めた結果と考えられる。

４．池辺陽研究室での活動

No.28の経験を持って、1956年に広瀬鎌二建築技術研究所に勤務し、下記の作品に関わった。

ＳＨ－12　公団試作１号住宅　担当中原暢子

ＳＨ－13　担当の記載なし。

ＳＨ－16　担当：中原暢子 佐藤恒子 国場幸一郎

その頃のことを広瀬鎌二は次のように述べている。

「SH-１を作ってからしばらくは鉄骨造の技術的な追求という点では計画的な積み上げは行われていなかったが、公団試作住宅（SH-12）を契機に方向が定まり軌道に乗った。それは構造体と壁との分離ということであり、・・・・」[4)]

「この試作に対して最初に提示された、公団の条件は、

a. 簡易耐火構造（日本住宅公団法施行規則第２条第３項）の内容を備え、軽量Ｃ型鋼を構造主体とした新構造法の組立て

b. プレファブ方式およびマスプロ方式に乗り得る構造法の考案

以上の２項目であった。」[5)]

「工場生産住宅へのアプローチということが主題として計画されていたので、構造もできるだけ単純で、接点の複雑さをさけるために六米角の

単位と、ピン構造、熱間圧延の単純材での組立てである。中央部のスパン方向の水平力が一寸心配だったので、北側にひかえをとりここをサービスヤードに利用した。」[6)]

「壁は外周壁も間仕切も自由に配置することができた。」[7)]

「構造体と壁の分離」という広瀬鎌二の重要なタイミングに設計担当として貢献し、モデュラーコーディネーションの研究成果を設計活動に生かしたといえる。広瀬鎌二にも日本的なものを漂わせる雰囲気があるが、少なくとも日本的なものをその根本に据えたものではなかった。

5．池辺陽研究室での活動

短期大学部卒業後実務経験4年、昭和32年（1957）一級建築士を受験し12月に合格した。登録は昭和33年5月10日で一級建築士登録番号は27343号である。

同年に林雅子も同時に受験している。合格番号が中原S 3270242、林S 3270243と続き番号であるので一緒に受験したものと思われる。林も合格し昭和33年2月28日に登録している。登録番号は26802号である。

林・山田・中原設計同人の山田初江は学年が1年下であり、昭和33年（1958）12月に山田初江が一級建築士試験に合格する。

女性建築家として著名な土浦信子（1900生）、吉田文子（1913生）、浜口ミホ（1915生）のうち一級建築士の資格を取得したのは浜口ミホのみである。因みに昭和28年12月合格発表、昭和29年9月20日一級建築士登録している。登録番号は21730号である。

奥村（旧姓戸塚）まことは 昭和5年（1930）生れ、昭和28年（1953）年東京芸術大学美術学部建築科卒業、昭和29年（1954）藝大先輩の奥村昭雄と結婚、昭和33年（1958）吉村順三設計事務所入所、吉村事務所19年間勤務の後、独立、奥村設計所設立、後に木曽三岳奥村設計所となる。奥村まことは、山田初江と同様昭和33年（1958）12月一級建築士試験に合格、登録は昭和36年5月（1961.5）、吉村順三設計事務所に昭和33～47年（1958～72）勤務している。

林雅子、山田初江そして中原暢子は林・山田・中原設計同人を林、中原が一級建築士登録を行った昭和33年（1958）に設立している。一級建築士事務所登録番号2023号である。

これまで女性建築士による一級建築士事務所は、昭和29年（1954）に設立された浜口美穂建築研究所があるが、新制大学を卒業した女性建築家が、一級建築士事務所を女性のみで設立したという意味でこの林・山田・中原設計同人は画期的なものであった。

小川信子は、「同時代の男性たちが独立しグループで設計事務所を開設する動きがあり、雅子さん達はそんな先達の試行錯誤の情報を得ながら、目白の中原さん宅（私の隣室）で協議を重ね、林・山田・中原設計同人（通称：ハヤナ）のシステムを作り上げていかれました。」[8)] と述べている。

又、中原は「横浜の婦人団体から、女性のための会館を作りたいという依頼が来たのを機に、事務所を開設した。」[9)] と述べている。仕事にはならなかったらしく、現在収集した設計図書には記録は残っていない。

一方、「仕事は共同では出来ない」という方針で仕事は個別に行った。共同できるのは「経営」・「場所」・「所員」に限定した。

設計図書に記載されている事務所名については初期には若干の混乱が見られる。昭和33年、34年については通称「はやな設計同人」とされ、一級建築士事務所登録番号は2023号である。昭和35年（1960）からは、「林・山田・中原設計同人」と記載され、従来のような手書きではなくゴム印となっている。通称ハヤナ設計同人は初期からの呼び名であったと推測される。

所在地については、昭和33年は東京都文京区表町109（又は表町109原方）となっている。初めは木賃アパートの4畳半一間からはじまった。台所、便所共用、昭和35年からは、東京都台東区上野南大門7三春ビル、そして昭和46年からは東京都新宿区南元町19信濃町外苑ビル502である。

6．設計図書等の概要

設計事務所では、3人の建築家の設計が明確に

区分されており、共同設計は見当たらない。

計画案を含み100件の設計図書が残されており、中原暢子設計の住宅以外（併用住宅を含む）の作品は、

① 病院建築4件
② 商店建築4件
③ 工場建築2件
④ 宗教建築2件
⑤ 旅館建築1件
⑥ 学校建築3件
⑦ 事務所建築5件
⑧ レストラン2件
⑨ アトリエ1件
⑩ 児童館1件
⑪ 展示施設1件

以上26件である。

7．長覚院

特に長覚院はHPシェル構造を使った意欲的な作品である。建築文化1962年10月号の長覚院について概要が掲載されている。タイトルは、「H.P. シェルと伝統の融合」であり、近代的なH.P, シェル技術と伝統をどのように融合させるかが設計のポイントである。天台宗正方形の平面に45度振ったHPシェルを4枚合わせている。寺院という伝統的な建築に対して最先端の技術を使い、尚且つ「構造表現主義」的な建築である。

中原暢子の師、池辺陽や広瀬鎌二は住宅問題の解決のため住宅の工業化（プレハブ化）を追求した大家であるが、新しい材料や技術を積極的に活用しようとする近代的建築思想は一貫して流れている。

その一つがシェル構造である。1953年（昭和28年）には丹下健三（構造：坪井善勝）による広島子どもの家や愛媛県民館が竣工している。池辺陽の建設工学研究会も沼津市公会堂の屋根に円筒シェルを使っている。

一方海外の動向であるが、シェルについての一般的な紹介を1953年（昭和28年）1月Architectural Forumが行った。これを日本の建築雑誌「国際建築」が1953年（昭和28年）3月号で直ちに翻訳し紹介している。「モーダニストが犯した最大の罪？－MITのオーデトリウムと礼拝堂　エーロ・サーリネンの設計－」というタイトルである。そしてこれは「形態は機能に従う」と宣言したルイス・サリヴァンのテーゼの再検討を意味していると述べている。つまり構造表現主義に対する疑問を呈していると同時に、シェル構造についての一般的な紹介を行っている。日本に比べて海外は構造表現主義に対して慎重な姿勢を示している。

8．長覚院の設計変更の意味

図1、図2にみる長覚院は、水平線が強調された近代的な形をしている。模型が作成されるまでは寺からの意見はなかったようだが、模型が完成すると積極的な意見がもたらされた。

境内の長覚院縁起には、「西林寺長覺院淨泰寺。天長7年（830年）慈覚大師1）関東巡錫（じゅんしゃく）のみぎり、この地に来たり、村人を教化し一宇の堂を開いたのに創まると伝えられる。以来村民の滅罪寺として法灯が維持され、江戸時代末期は、寺小屋として村民子弟の教育の場となり、明治の学制とともに、現在の浦和市立木崎小学校の前身となった。」とされる。

建替前の旧長覺院は茅葺屋根の本堂一つの形式で「300年以上村あずかりの形で存続」しており、定まった住職はいなかった（図7）。

こうしたコミュニティの中核としての長覚院の形は「昔の面影が感じられる」ものでありたいと屋根を2m高く上げることを直ちに決定した。

さらに長覚院建設録によれば、「堅にして温」

図7　旧長覚院本堂

という言葉が用いられ、打ち放ちコンクリートの直線で構成される本堂に「温」という暖かく柔らかい雰囲気が感じられることを求めていた。そこでシェルの縁梁を曲線にすることでその要望に応えた。

具体的な形をイメージすることは難しいので、図8、図9のような大きな模型を作って確認している。

白井晟一は1960年（昭和35年）世界建築全集12「現代3　文化と厚生」のなかの、「仏教と伽藍　建築学生のために」で次のように述べている。

「・・・・折版構造の壁で囲み、ハイパーボリック・シェルの屋根をのせる伝統克服の勇気はよい。

だがテクノロジーの選択も、民族感性の質に昇華された自覚的な創造知性の体験をくぐってくるのでなければ、すくなくとも主体性の確かさが求められるこうした表象の造形には奉仕できない。」[10)]

伽藍を設計するものは現在の仏教についての深い理解なくしては設計できないと述べている。高村光太郎賞を受賞した善照寺を設計した、白井晟一のエッセイは、見逃せないものであった。見学にも寺の住職や檀家と一緒に訪れている。

同時に、寺院のシンボルを継承している。①天台宗宗紋（三諦星）②相輪　③提灯　④田字草紋（真鋳板抜　金メッキ）等であった。

1964年（昭和39年）、東京オリンピックを目指して、シェル構造の建築物に対する関心は高まっている。特に著名なものでは芦原義信の駒沢オリンピック公園総合運動場体育館、丹下健三のカトリック関口教会、菊竹清訓の東光園が完成する。中原暢子が設計した長覚寺の設計は昭和37年2月（1962.2）に終了している。この間の時期にあって、構造表現主義と寺院の伝統にまっ正面から取り組んだ作品である。表現主義的な嗜好を開花させ、師の戦後の禁欲的な指向性を離れて自由に羽ばたいているように見える。

9．水野レストラン

水野レストランは中原暢子昭和44年（1969）の設計作品である。

デザインとしては「洋館」、「蔵」、「和館」が混在しており、通りに面して並列して配置されている（図10）。スケールは小さいが明治・大正に見られる洋館と和館が併存する形式である。特記仕様として、「この建物は明治時代の建物を再現するように心がける」と記載され、その他は日本建築学会建築工事標準仕様書A種によるとされている。

図8　直線のHPシェル

図9　曲線を使ったHPシェル

施主（建築主）氏名欄には、水野幸夫となっているが、このレストランの経営者は水野蔵左衛門である。水野家は代々当主が「蔵左衛門」を名のっている。氏はインダストリアル・デザイナーであり、これを期にレストラン経営に乗り出す。弟の水野正夫はファッション・デザイナーである。場所は日本女子大学の前にあり、同一経営者による「三昧匠蔵」（水野レストラン）、「カフェ水野」「丁」はこの界隈では有名な存在である。2010年4月に水野蔵左衛門が亡くなり、売却され現在の所有者は日本女子大学である。

現在、「三昧匠蔵」ともに「カフェ水野」、「丁」は閉店した。

図 10 「蔵」「和館」の道路沿いの空間

この建築はレストランとしているが、設計段階では専用施設ではなく併用住宅である。「洋館」(図 11）は地下 1 階（半地下）地上 3 階であり、1 階は洋風のレストラン（椅子式)、2 階（居間、食堂、夫婦寝室）3 階はこども部屋が 2 室ある。

真ん中の「蔵」は地下 1 階地上 2 階で 1 階は、便所、風呂等の設備部分となっている。2 階は従業員の部屋となっている。「洋館」及び「蔵」の地下は厨房であり一体となっている。「洋館」への配膳はリフトによる。

「和館」へは「蔵」の中央を横切って抜ける。「和館」は、10 畳、5 畳、12.5 畳の 3 つの和室に分割され庭に面して縁側が設けられている。

「洋館」「蔵」は鉄筋コンクリート壁式構造である。「和館」は伝統的な和小屋ではあるが、梁には 250 × 50 × 32 のコの字型断面の鉄骨 2 本を合わせて掛け渡している。

「洋館」1 階レストラン部分のインテリアの細部については図面化されていない。格天井であり(図 12)、格縁はラワン OP、格板には写真のように花の模様が描かれている。この華やかさは、中原邸の茶室の衝立の模様を思い出す。

照明も設計図書に記載されているものとは全く異なっている。

建具詳細についてもそれほど細部にわたって図面化は行っていない。これは、レストランのオーナーでありインダストリアル・デザイナーでもある水野蔵左衛門との共同作業ではないか。水野は新日本料理を開発し建築・インテリアとの総合的なサービスを提供している。

以上のように中原暢子の設計方法は、統一的なデザインを指向するのではなく、そこに関わる人々の思いや欲求を掬い上げて形にしてゆくスタイルが形成されてくる。そこには師池辺陽の「実験主義」的なアプローチから脱して、一人の建築家として作品をまとめ上げていく方法が確立されていく。

10. 長覚院の模様替え

1982 年(昭和 57 年)長覚院の模様替えが行われ、銅板葺きの屋根に代えられる（図 13)。坪井善勝の弓張丘展望台や、丹下健三の東京カテドラルなどの屋根を雨漏りの危険があるシェル屋根には適切な対応である。長覚院の模様替えに当たっては職人技を生かした伝統的な手法で葺いている。寺

図 11　三味匠蔵の「洋館」部分

図 12　水野レストランの天井

の住職や檀家の思いを組み入れている。同時に外陣には格天井が張られている（図 14）。必ずしもシェル屋根にこだわらず、天台宗の荘厳さを具現化するという意味で、水野レストランでポストモダニズムの橋を渡った中原暢子にとっては違和感のない模様替えであったと推察される。

謝辞

本稿をまとめるにあたって今は解散した林・山田・中原設計同人の元所員白井克典氏、中原暢子先生の姪にあたる中原暢子自邸暢庵の所有者佐藤玲子氏に大変お世話になった。記して感謝したい。又、既に退職された杉本茂先生、金子雄太郎先生には中原暢子先生の作品をたどる機会と論文を書く上での様々な助力をいただき、ここに記して感謝いたします。

論文の内容については、いまだ聞き取りをできていない方々も多く事実認識の間違いを恐れています。忌憚のないご叱正をいただき更に建築家中原暢子像を明らかにしてゆきたいと考えます。

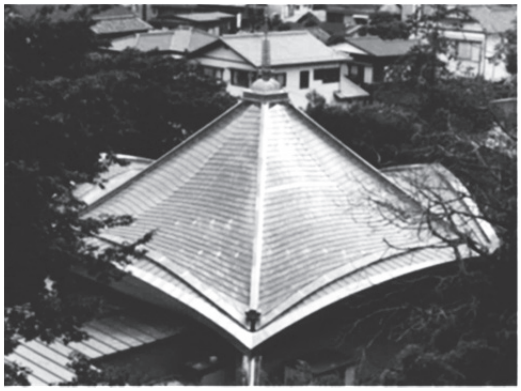

図 13　長覚院の模様替 銅板葺

図 14　長覚院の外陣に格天井を設置 1982. 6

参考文献

1　難波和彦：戦後モダニズム建築の極北　池辺陽試論.（彰国社，東京，1998）
2　松川淳子，中島明子，杉野展子，宮本伸子：日本における戦前戦後の草創期の女性建築家・技術者.（住総研研究年報 No.30，東京，2003）
3　国際建築：（美術出版社，1950-1962）
4　建築文化：（彰国社，1946-1962）
5　新建築：（新建築社，1950-1962）
6　浜口隆一・神代雄一郎：世界建築全集 12　（現代 3 文化と厚生）.（平凡社，東京，1960）

引用文献

1）栗田勇：現代日本建築家全集 17（広瀬鎌二・池辺陽）. p.201（三一書房，東京，1972）
2）「建築家林雅子」編集委員会：建築家林雅子　1928-2001　HAYASHII MASAKO,architect. p.21（新建築社，東京，2002）
3）難波和彦：戦後モダニズム建築の極北　池辺陽試論. p.92（彰国社，東京，1998）
4）広瀬鎌二：フリー・プランニング　現代日本建築家全集 17　池辺陽・広瀬鎌二. p.135　（三一書房, 東京, 1972）
5）広瀬鎌二：公団試作 1 号住宅. p.56（新建築，東京，1957.1）
6）広瀬鎌二：柱梁小屋の接合部のアプローチ　SH-1 SH-9　SH-13. p.27（建築文化，東京，1957.10）
7）広瀬鎌二：フリー・プランニング　現代日本建築家全集 17　池辺陽・広瀬鎌二. p.135　（三一書房, 東京, 1972）
8）小川信子：林昌二・雅子邸見学に寄せて. p.3（UIFA JAPAN NEWSLETTER　No.93 Jan.25，2013）
9）「建築家林雅子」編集委員会：建築家林雅子　1928-2001　HAYASHII MASAKO,architect. p.23（新建築社，東京，2002）
10）浜口隆一・神代雄一郎：世界建築全集 12（現代 3 文化と厚生）. p.85（平凡社，東京，1960）

（受付　2016.3.23　受理　2016.7.11）